

岡山県における「認知症支援のカフェ」に関する調査報告

堀川涼子

美作大学・美作大学短期大学部紀要（通巻第65号抜刷）

## 岡山県における「認知症支援のカフェ」に関する調査報告

A Survey Report on the “Dementia Cafes” in Okayama

堀川 涼子

キーワード：認知症カフェ オレンジカフェ アルツハイマーカフェ

### 1. はじめに

現在、日本では平均寿命の伸長による長寿化、高齢化が進んでおり、今後もその傾向は続く予想されている。「総人口における65歳以上人口の割合（高齢化率）は2017年10月1日現在27.7%であり、2025年には30.3%になる」と推計されている<sup>1)</sup>。65歳以上の認知症高齢者数と有病率についてみると、2012年は認知症高齢者数が462万人と、65歳以上の高齢者の約7人に1人であったが、2025年は約730万人と約5人に1人になるとの推計されている<sup>2)</sup>。つまり、高齢者の増加、特に後期高齢者の増加により、認知症高齢者も増加することが見込まれ、これに伴い介護をする家族も増加するとされている。

このような状況を踏まえて、2015年に国は、団塊の世代が75歳以上となる2025年を見据え、認知症の人の意思が尊重され、できる限り住み慣れた地域の良い環境で自分らしく暮らし続けることができる社会の実現を目指し『認知症施策推進総合戦略～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて～（新オレンジプラン）』を策定した。このプランは、厚生労働省のみならず、内閣官房、内閣府、警察庁、金融庁、消費者庁、総務省、法務省、文部科学省、農林水産省、経済産業省、国土交通省の関係府省庁との共同策定であり、まさに「国を挙げて」策定したものである。

### 2. 認知症カフェとは

認知症カフェは、新オレンジプランにおいて、「認知症の人やその家族が地域の人や専門家と相互に情報を共有し、お互いを理解し合う場」<sup>3)</sup>とされている。

表1 認知症カフェの共通概念

- 認知症カフェは、認知症の人と介護者を第一に、地域住民、専門職も、住みやすい地域社会作りに貢献できる場所であること。
- 認知症カフェは、多様な人々の対話と会話を基盤としており、地域そして地域住民との緩やかな調和と協働により成立するものである。そのためには、
  - ・認知症の人が安心して参加できるよう、合理的な配慮がなされること、
  - ・内容については特に認知症の一次予防（認知症にならないための取り組み）が主目的ではないなどの配慮がなされていること、
  - ・アクティビティを取り入れる際は対話と会話を促すための手段であり、それ自体が目的ではないことを意識すること、等が必要であり、静かに休める場所なども準備されることが望ましい。

出典：社会福祉法人東北福祉会 認介護研究・研修仙台センター（2017）「平成28年度老人保健事業推進費等補助金（老人保健 健康増進等事業）報告書～認知症カフェの実態に関する調査報告～」, p.14

武知は「認知症の人やその家族・知人、医療やケアの専門職、そして認知症について気になる人などが気軽に集まり、なごやかな雰囲気のもと交流を楽しむ場所である。オランダで『アルツハイマーカフェ』として始まったのがきっかけで、日本でも2012年、厚生労働省の文書に記載され、各地で開催されるようになってきた<sup>4)</sup>。」と述べている。

さらに、2017年に出された「平成 28 年度老人保健事業 推進費等補助金（老人保健 健康増進等事業）報告書～認知症カフェの実態に関する調査研究事業 報告書～」では、わが国の認知症カフェの共通概念として表の通り示されている<sup>5)</sup>。（表 1）

岡山県内では2016年には44ヶ所であったカフェが2018年1月末には107ヶ所で開催<sup>6)</sup>されるなど、近年ますます広がっている。

### 3. 調査概要

岡山県内には現在、100ヶ所以上の認知症カフェが設置・運営されている。しかし、先にあげた「共通概念」は必ずしも明確になってはおらず、その内容も参加者もまちまちなのが現状である。そこで、岡山県内の認知症カフェの実態を明らかにし、認知症本人や家族が自分に適したカフェを探ることができるよう、岡山県内の認知症カフェの実態調査を行った。

以下、調査の概要である。

調査主体：公益社団法人 認知症の人と家族の会岡山県支部「認知症カフェネットワーク委員会」

調査対象：岡山県長寿社会課が把握している岡山県内の認知症カフェ108ヶ所

調査方法：自計式・郵送調査

調査期間：2018年8月～11月

回収率：91.6%（99/108か所）

なお、筆者は、この調査主体である認知症カフェネットワーク委員会の副委員長であり、主にアンケート調査票を作成し、集計と分析を行った。

### 4. 調査結果

(1) 認知症カフェ（以下、カフェとする）の内容

#### ①カフェの実施プログラム状況

認知症の本人や家族が「安心できる場」として「お茶を飲みながらお話をする」ことが前提のカフェであるが、アクティビティ（体操やレクリエーション等）やミニ講話が多くのカフェで行われている。医師や看護師、リハビリ職、福祉職等が専門的な講話をするカフェもあれば、地域のボランティアが話題提供をするカフェもある。一方で特にプログラムはなく、いつ来てもいつ帰っても良いというカフェも多くあった。ただ、2時間程度のカフェでプログラムが用意されているところは、多くの人が開始から終了まで参加していることがほとんどであった。（図1）

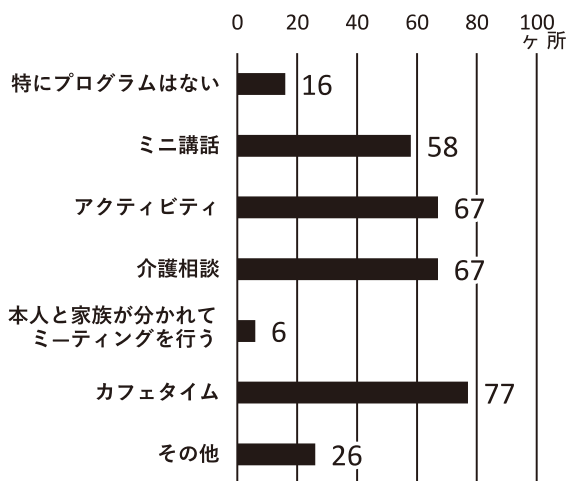


図1 カフェで行われている内容（現状）

#### ②介護相談の状況

多くのカフェでは介護相談を行っている。専門職が相談を受けるところもあれば、ボランティアを中心としたスタッフが傾聴してくれるところもある。中には認知症の人や家族が同じ立場で心のうちを話し合えるカフェもあった。（図2）

#### ③カフェ開催の目的と現状

カフェ開催の目的は「すべての住民等が気軽に集え

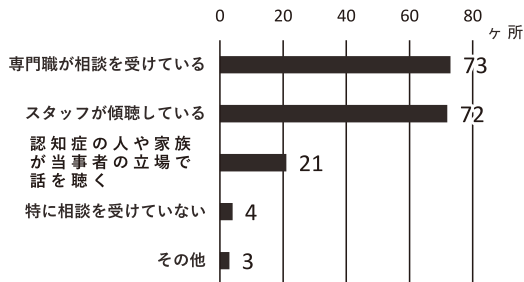


図2 カフェで行われている介護相談

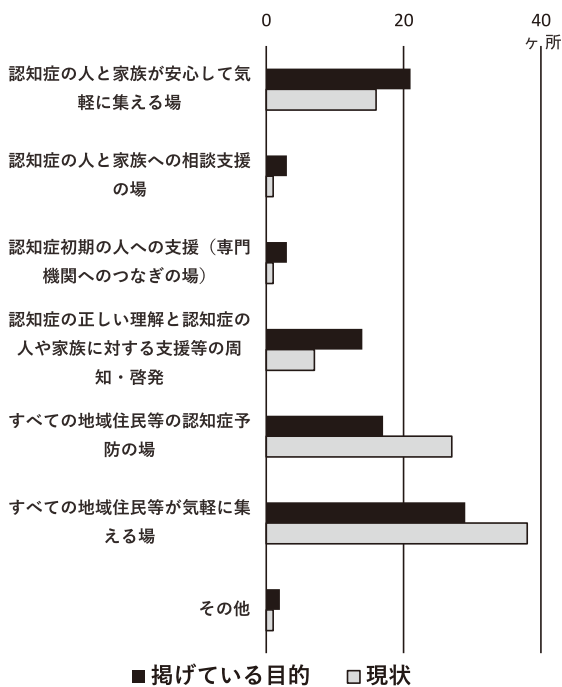


図3 カフェ開催の主な目的と現状

る場」が最も多く、次に「認知症の人と家族が安心して気軽に集まれる場」と続く。一方で、現状は「すべての住民等が気軽に集える場」が最も多く、次に「すべての地域住民等の認知症予防の場」となっており、現在は「認知症の人や家族を主体としたカフェ」よりも「地域住民の集う場」としての要素が強いところが多かった。(図3)

#### ④カフェの参加状況

カフェの主なスタッフの中に保健・医療・福祉の専

門職がないカフェは99ヶ所中6ヶ所、その内4ヶ所には参加者の中に専門職がいる状況であり、ほとんどのカフェに専門職がいて、前述したように専門職が相談を受けたり、講話をしたりしている。また、52ヶ所(54%)のカフェではスタッフとして地域住民が関わっており、半数以上のカフェが地域住民と共に開催していることがわかった。

1回あたりの平均参加者数は、スタッフを合わせて、10人未満の小規模なカフェが26%、20人未満のカフェが30%と両方で半数以上の56%を占めた。一方、40人以上という大規模なカフェも1割(9%)あり、スタッフを除くほとんどは地域住民が参加者であるカフェであった。(図4)

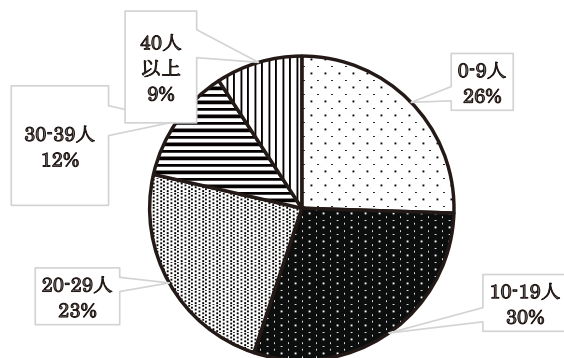


図4 カフェの平均参加者数(スタッフを含む)

#### ⑤認知症の人と家族の参加状況

認知症の人と家族が3割以上参加しているカフェは、参加者が20人以上のカフェでは2ヶ所(2%)にとどまり、参加者が20人未満の小規模なカフェでは22ヶ所(23%)であり、全体では25%に過ぎない。75%のカフェは認知症の人と家族が3割未満ということになり、必ずしも本人や家族の参加が多くないことがわかった。一方で参加者を認知症の人とその家族のみに限定しているカフェもある。(図5・図6)

#### (2) 認知症カフェの分類

カフェの分類として、【A主に保健・医療・福祉の専門職(以下、専門職)がプログラムを組み開催して

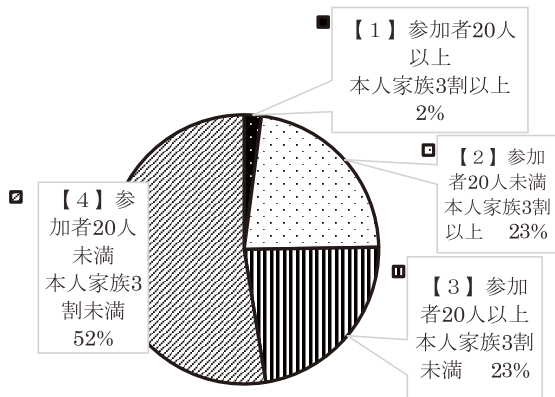


図5 参加者にしめる認知症の人や家族の割合

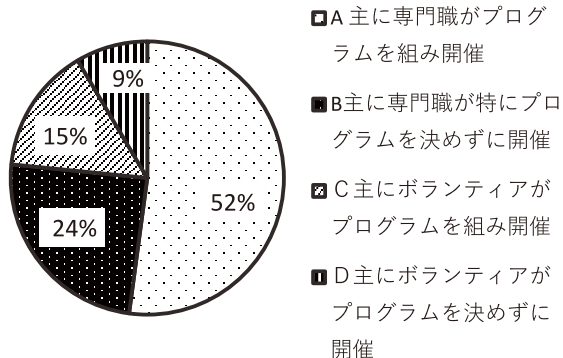


図7 カフェの分類

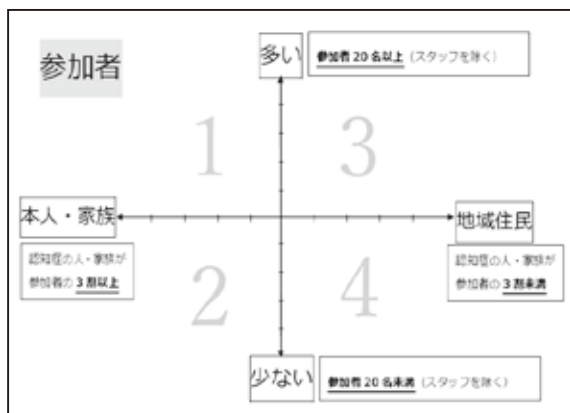


図6 参加者にしめる認知症の人や家族の割合

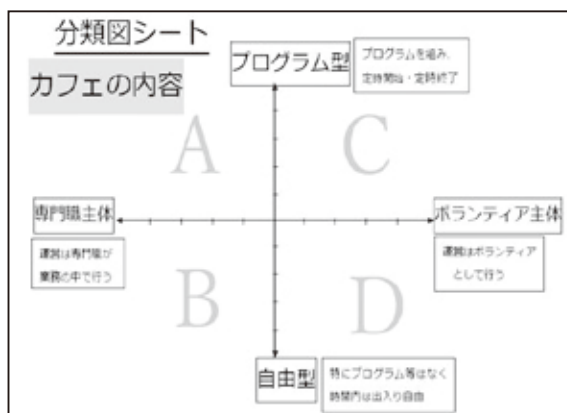


図8 カフェの分類シート

いる】、【B主に専門職がプログラムを決めずに開催している】、【C主に地域のボランティアがプログラムを決めて開催している】、「D主に地域のボランティアがプログラムを決めずに開催している」の4分類とした。

### ①開催場所別の状況

福祉施設や病院等において、専門職が開催しているカフェは76%【A・B】、地域の公民館等でボランティアが開催しているカフェは24%【C・D】であった。(図7)

### ②プログラムの有無別状況

全体でプログラムを決めて2時間程度で開催されるカフェ【A・C】が3分の2(67%)、特にプログラムはなく「カフェ」として開催時間中自由に出入りできるカフェ【B・D】は3分の1(33%)という結果であっ

た。(図8)

## 5. 考察、まとめ

以上、調査により岡山県内の認知症カフェについての現状を把握することができた。調査結果から見てきたのは、その運営方法や内容等の基準が国や県から示されていないため、多くの認知症カフェは手探りで運営され、内容や目的、対象者やスタッフは様々な形であるという現状である。

認知症本人や家族が認知症カフェに参加するにあたり、専門職または同じ立場の認知症の人や家族に相談をしたり話をしたりするために参加するのか、地域住民と講話や歌・工作などを楽しみに参加するのか、目的に応じてカフェを選ぶことが必要であり、そのための情報提供が必要であると考えた。

そこで、認知症カフェネットワーク委員会では、「ご本人や家族のために作った岡山県認知症カフェハンドブック<sup>(1)</sup>」を作成した。アンケート調査とハンドブックによって、認知症の人やその家族がカフェを選ぶ際の参考にしてもらえることを願っている。

#### 引用・参考文献

- 1) 内閣府 (2019)『令和元年版高齢社会白書』, p.2
- 2) 内閣府 (2017)「平成29年版高齢社会白書」, p.19
- 3) 厚生労働省他 (2015)『認知症施策推進総合戦略～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて～(新オレンジプラン)』概要版, p.6
- 4) 武地一 (2015)『認知症カフェハンドブック』クリエイツかもがわ, p.16
- 5) 社会福祉法人東北福祉会 認知症介護研究・研修仙台センター (2017)「認知症カフェの実態に関する調査報告」, p.14
- 6) 岡山県保健福祉部資料

#### 註

- (1) 認知症カフェネットワーク委員会が行ったアンケート結果をまとめ、認知症の人や家族が自分に適したカフェに参加できるようまとめたハンドブック。カフェの連絡先や内容、参加者などを分類した一覧と、8ヶ所のカフェに実際視察に行った様子をまとめている。公益社団法人認知症の人と家族の会岡山県支部発行 (2019年3月)。

